文部省特選 教育映像祭優秀作品賞
平成七年度工芸技術記録映画
35ミリ・カラー・34分
企画 文化庁 製作 桜映画社

小鹿田焼（おんた）

小鹿田焼は一九九五年五月、国の重要無形文化財に指定された。それをつくっている集落の人たちがまとまって対象となる集団指定はめずらしい。大分県は日田の山間の集落に、どうしてこんなに見事な陶芸が受け継がれているのか。
映画は、その焼きものづくりの工程を追いながら、伝統の謎を解き明かそうとする。
遠く李朝期の朝鮮から伝えられたらしいわざを守り、技法をのばし、柳宗悦を喜ばせ、バーナード・リーチを狂喜させた理由が納得できる。雄弁な記録映画である。

（映画評論家 登川直樹）

小鹿田焼（おんた）

プロローグ

大分県日田の山奥に、約300年にわたって焼きものをつくりつづけてきた集落がある。
10軒の窯元が、小鹿田焼の伝統を守り、機械力に頼らず、今も昔ながらの技法で焼きものをつくっている。

小鹿田焼とは

小鹿田焼は文禄・慶長の役後、朝鮮半島出身の陶工によって伝えられた焼きものの技術が、宝永2年（1705年）頃、高取、小石原をへて、現在の皿山に導入されて定着したものと言われている。

昔の作品

もともと甕（かめ）や鉢、壺など、近在の農家の日用雑器をつくってきた半農半陶の民窯（みんよう）で、昭和の初め頃までその存在はまったく知られていなかった。

柳宗悦（1889-1961）

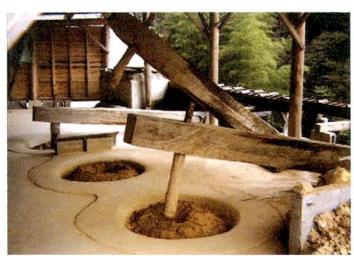
小鹿田焼を初めて広く世に紹介したのは、民芸の美を称揚した柳宗悦であった。

バーナード・リーチ（1887-1979）

イギリスの陶芸家バーナード・リーチも、小鹿田焼に注目した。リーチは、かねてから中国の宋時代にあった「飛白文（ひはくもん）」の技法を知りたいと思っていたが、同じような技法が小鹿田にあることを聞いて訪れたのであった。

陶土の精製1（土取り）

土取りは昔から集落共同の作業で、かつては唐鍬（とうぐわ）やつるはしを使って土を掘った。陶土は、今も皿山地区内からの露天掘りである。陶工たちは山の土を大事にし、唐臼で砕いた土の分量だけ焼きものを焼いてきた。



陶土の精製2（唐臼での粉砕）

土は土置き小屋に保管し、乾燥させたあと、唐臼で10日から2週間ほど荒土を打ち砕いて、こまかい粘土の粒子にする。

陶土の精製3（水簸）

唐臼で砕いた土を窯元の庭先に運び、水簸という作業をする。これを何回かくり返し、天日で乾燥させて、やっと陶土が出来上がる。土をつくるのは、昔から窯元の女性たちの仕事であった。

釉薬の精製

小鹿田焼の釉薬の材料は、白土、サビ石、藁灰、木炭、銅や鉄の粉で、すべて窯場に近いところから採取している。その配合も、昔から伝承された方法である。

成形

成形は男の仕事で、足で蹴る朝鮮系の蹴ロクロを使う。昔からロクロは一家に2台と決められていた。技法としては、小物はひき造り・玉造り、大物は底打ち・練付（紐づくり）・腰継ぎなどがある。

成形の道具類

成形の道具には、形をつくり出す道具と、仕上げの道具などがあり、どれも陶工たちの手製である。道具の形にも使い方にも、小鹿田の伝統が感じられる。

装飾の技法

装飾の技法には、刷毛目・飛び鉋・櫛目・指描き・打掛け・流しぐすりなどがある。単調な中にも、手仕事ならではの独特の味がある。

飛び鉋

全体を白化粧した肌に、飛白文のこまかい刻み目をつける「飛び鉋」。リーチが驚嘆したという中国・宋時代の磁州窯にあったこの装飾の技法も、今は小鹿田の技術になっている。

釉薬

釉薬は、フラシ釉（透明釉）・地釉（飴釉）・セイジ（緑釉）・薄セイジ・黒釉・ドーケなどがあり、施釉は、素焼きしない肌に柄杓を使った生掛けを基本としている。

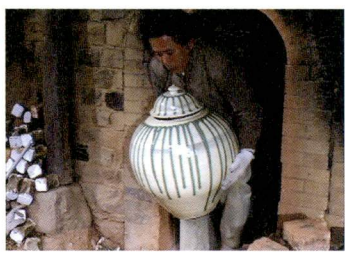
小鹿田焼（おんた）

共同窯

小鹿田には新しい個人の窯もあるが、昔からの共同窯は、皿山地区の中央にある。8室からなる連房式登り窯で、今はこの窯を窯元5軒で使用している。

窯焚き

窯焚き（焼成）は、火口焚き（前焚き・あぶり焚き）・露焚き・あんこ焚きと、伝承された登り窯の焚き方である。8番目の窯まで焚き上げるのに、50～55時間はかかる。

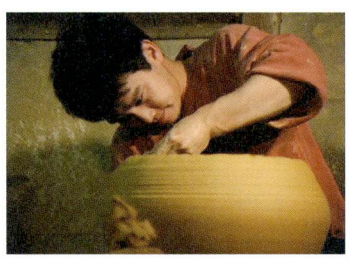


窯明け

窯焚きの終わった窯は、3日間ほど自然の風にあて、冷えるのを待って窯明けの日を迎える。

完成した作品

どれも民芸陶器らしい重厚さと、素朴な、温かみのある焼きものである。製品は個人銘は入れず、小鹿田焼の名前で出している。



後継者たち

どの窯元も、男子1人が窯を継ぐという習慣を今も守っている。

唐臼のある風景

ここには、唐臼をつくる後継者もいる。九州の窯場で動いている唐臼は、もうここだけになった。

協力

日田市教育委員会

大分県立芸術会館

財団法人日本民芸館

寺川泰郎

小鹿田焼技術保存会

製作スタッフ

製作 村山和雄

脚本・監督 村山正実

撮影 西山東男

照明 森準蔵

編集 吉田栄子

ネガ編集 加納宗子

選曲 山崎宏

録音 堀内戦治

効果 柴崎憲治

現像 IMAGICA

ナレーター 相川浩